
アイドルは男の娘！？

橋本スバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルは男の娘！？

【NZコード】

N4136P

【作者名】

橋本スバル

【あらすじ】

女顔がコンプレックスな青年芹沢梓。ある日適当に外を歩いていたら、偶然アイドルのオーディションを受けることになってしまつた。しかも競争倍率が200倍を超すそのオーディションに通つてしまつて……。

美少女な青年（前書き）

始めまして、橋本スバルです。不定期更新ですが、よろしくおねがいします。

美少女な青年

「はあ～」

鏡を前にして俺、せつざわすずき芹沢梓は深いため息を吐く。

何年前からだろ？

朝起きて鏡を見ながら溜息を吐くのが習慣になつたのは。確か、小学校高学年の時だつたと思う。

クラスで顔のことをバカにされて、それから鏡を見るのが嫌になつた。

見るのが嫌なら見なければいいじゃないかって？

考えてみろ。

鏡を見ないで生活なんてできるか？

少なくとも、俺は絶対に出来ない。

顔を洗う時だつて、歯を磨く時だつて鏡は必要だ。

もし鏡無しで生活出来る奴がいたら教えてくれ。

俺が土下座しても教えを請いに行くだろ？

まあ、これで分かつたと思うけど、俺は自分の顔にコンプレックスを持つている。

だけど、不細工トーナメントに出たら優勝する様な顔じゃない。

むしろそんなトーナメントに出たら一回戦敗退するだろ？

別に俺の顔は不細工な訳じゃない。

俺の顔はかなりの美少女なんだ。

もう一度鏡を見てみると、そこに映るのはどうからか？見ても美女。

それも、そんじょそこらのアイドルの比じゃない。

白い肌に、大きな目。

まつ毛も長くて、左耳の斜め下には御丁寧に泣きぼくろがある。ショートカットの髪型もこの上無いくらいに似合つていて、これで男なんて自分でも信じられない。

信じられないけど、16歳になつても胸は膨らまないし、第一俺の股の間には竿と2つの球がついてるんだから男なんだわ。多分お袋の腹の中で何かが起きて、女として生まれてくるはずだったのに余計な物がくつついちまたんだな。

ホントに迷惑な話しだ。

この顔のせいでの今まで色々な目に遭つて来た。

男に告白された事なんて星の数ほどあるし、やつと女子に告白されただと思ったら『私のお姉さまになつてくださいって』言われるし、中年のおっさんには『キミ、モデルをやってみないか?』とか言われてもう散々だ。

やつぱり無駄に身長が高いのも関係してるのかもしれない。
今は高校2年生なのだが、身長は176?ある。
モデルの勧誘が多いのは多分このせいだわ。

「やつぱり成形した方がいいのかな?」

鏡を見つめながらポツンと呟く。

「何言つてるの?あんたまだキレイになりたいって言つの?」

「うわっ!姉貴、いつの間に!」

いきなり後ろから声をかけられて振り向くと、そこには姉貴こと芹沢里奈^{りな}が目を瞑そうに擦りながら立っていた。
身長は俺より20?近く低いが、俺より5歳も年上で、どつかのアイドル事務所に努めている。

アイドル事務所と言つても姉貴がアイドルな訳じゃなくて、あくまでプロデューサーの役割だ。

姉貴も可愛い顔をしてると思うんだけど、本人いわく自分には裏方の方が合つてるらしい。

「まったく、そんなキレイな顔しておいてまだ足りないなんて、どうかしてるんじゃない?」

「別にキレイになりたい訳じゃねえつて。一応俺も男なんだから、男らしくして欲しいと思つただけ」

「ふーん……その割には服も髪型も女物よね

「これは仕方ねえだろ！」

俺だつてこんな髪型や服は嫌だ。

だけど、お袋はスタイルストで親父は服屋の社長だ。

当然俺の髪はお袋が切るわけで、どれだけ言つても『似合つ髪形にする』とか言つてこの髪型にするのを止めてくれない。

親父も他のメーカーの服は着るなつて言つておきながら文物の服しか送つてくれないんだ。

文句言つても『スカート送つて無いだけでも感謝しろ』とか言い出しだ。

とにかく俺の周りには誰も味方がいない。

学校でもいつもからかわれて、気の弱い奴だつたら自殺してるね、多分。

「そうそつ、あんた今日用事ある？」

いきなり姉貴に今日の予定を聞かれる。

「えーと……別に無いけど」

少し考えてから俺はそう答えた。

今日は日曜日だが、特にやることはない。

家でぶらぶらしてゐつもりだつたけど、何だらう？

「じゃあ、今すぐ出かけた方がいいわよ」

「なんで？」

「家で今田脣からやるアイドルのオーディションの打ち合わせをやるの。あんた見つかつたら絶対メンドーなことになるでしょ？だから、午前中だけでも外にいる方がいいわ」

「なるほどね。分かった、じゃあ、飯食つたら適当にぶらぶらしてくるわ」

俺もいいかげんスカウトとかされるの嫌だからな。

だつて、あの人たちとにかく鬱陶しいんだ。

どれだけ断つてもしつこく言つてきて、男だつて言つても信じてくれない。

だつたら『詫惋を見せる』つて言つてズボン降らそうとしたらそれ

さえ止めやがる。

人の性別を見かけで判断するなつて思つけど、普通は見かけで判断するから文句も言えない。

まあ、とにかく姉貴の会社の人がある前にさつわと飯食つて外行か。

「さて、外行つてなにしようかねえ」

「あんたさあ」

「ん? なに?」

「ホント顔と声と言動一致しないわよね。顔はアイドル顔負けで、声も女役の声優になれるくらいいいのに、どうしてそんな喋り方なの?」

「放つとけ!」

しみじみと傷つくなつことを言つ姉に大声でいう。

続けて『顔も声も変えられないんだからせめて喋り方くらい男らしくしようとしてるんだよ!』とか言いたかつたけど、それはぐつと我慢する。

そんなこと言つたら間違いなくバカにされる。
バカにされることが分かつてゐにわざわざ言つ必要はない。

「ありや、そんなに怒るなつて」

「怒らせたのは姉貴だらうが!」

「はいはい。分かつた分かつた。それよりも、そんなゆつくりしていいの? 会社の人もうそろそろ来るわよ」

「え……うそお! ?」

「ホント、(ピンポーン) あ、ほら、チャイムなつた」

「マジかよ」

こんなに早く来るなんて聞いてねえぞ。

まだ8時にもなつてないのに、早すぎだつての。

「ほら、見つかりたくないなかつたら行つた行つた
姉貴は手をひらひら振ると、玄関へ歩いて行つた。

パジャマ姿で行くのはどうかと思つたけど、今は人のことより自分

の事だ。

俺は急いで自分の部屋に戻ると着替えて裏口から出て行った。

美少女な青年（後書き）

誤字脱字等があれば教えてください。すぐに直します。

出会いは突然

「それにしても、やることないな」

商店街を1人で適当に歩きながら俺は呟いた。
日曜日はホントに暇だ。

とにかくやることが無いんだよな。

普通の高校生なら日曜日は友達と遊びに行つたりするんだろうけど、
あいにく俺にはそんな親しい友人はいない。

しかも今俺は姉貴との2人暮らしだから、家族で出かける事も無い。
ちなみに言っておくが、両親がいない訳じゃないぞ。

俺は自分も合わせて7人家族で、姉3人と弟が1人いる。

姉貴が2年前から1人暮らしをしてて、俺も姉貴の家の近くの高校
に通いたかつたから住ませてもらってるんだ。
でも、今思えばこれが失敗だつたと思う。

俺が通つてた中学には小学校からの付き合いの奴がいっぱいいて、
親友もいた。

だけど、高校受験の時、何故か俺は皆とは違う高校を選んじました
んだ。

高校に入学早々顔のことをバカにされて、バカにしてきた奴と大喧
嘩。

結局入学式の日に謹慎処分になつて、友達の1人だけできなかつ
た。

部活に入れまだ良かつたのかもしれないが、あいにく俺は小中と
帰宅部を貫いてきた男だ。

今更やりたい部活なんて無い。

そりや最初の頃は少し寂しかつたけど、今ではもうすっかり慣れた。
適当にのんびりだらだらと過ごす事の素晴らしさに目覚めちまつた
からな。

俺の生活に刺激なんていらない。

平凡万歳だ。

「……なんだか考えてて虚しくなつてきたな…………本屋でも

行くか

俺はそう呟くと、本屋に向かつた。

10分も歩くと本屋に着いた。

この図書館は結構規模が大きく、俺は暇な時よく利用している。何となく本棚に並んだ本を眺めて、気になつたタイトルの本を取ろうとした時だつた。

「…………」

隣で何やら一生懸命背伸びをしている少女がいた。

見た感じ歳は俺と同じくらいで、可愛い顔をした長い髪の少女だ。身長は160?ない位だと思うが、本棚の方を本を取ろうとしていて手が届いていない。

つま先立ちして足がブルブルと震えていて、今にも倒れそうだ。

「う…………えいっ！えいっ！」

何気なく少女を眺めていると、背伸びでは手が届かないと分かつたらしく、次はジャンプをしだした。

だけど、ジャンプをしてもあと少し届かない。

「あの、取りましょうか？」

しばらく見てて、ちょっと可哀想になつてきただので声をかけてみる。

「ふえ！？」

すると、少女は声をかけられたことに驚いたのかその場でピヨンと飛び跳ねた。

そんなに驚かなくていいと思つんだけど、知らない人に声かけられたらこんなもんだろうか？

「どれが取りたかったんですか？」

「え…………えつと、その…………い、1番上の緑の表紙の本です」

「ん、分かつた。えつと、緑…………あつた」

緑の表紙の本はすぐに見つかって、俺はその本を取り出す。

本のタイトルは『アイドルになる秘訣』だ。

「はい、これでいいですか？」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

少女に本を渡すと、少女は嬉しそうに笑つてお辞儀をしてきた。

「いえ、困った時はお互い様ですか？」

俺もそう言つて笑いかける。

「あ、あの、もしよろしければ、お礼させてもらひませんか？」

「そんなのいいですよ」

「それでは私の気が收まりません」

少女の申し出を断ると、少女は笑顔から一転困った顔になる。そんな顔されると悪い事したみたいな気持になるじゃないか。

「やつぱり…………駄目ですか？」

少女の眼には涙が溜まつてきている。

「やつぱり男つてのはバカな生き物だよな。
可愛い娘が相手だと何でも言つとおりにしてしまつ。

「分かりました」

「本当にですか？ ありがとうございます……」こではなんなので、近くに喫茶店がありましたからそこに行きましょう」

少女はさつき泣きかけてたのがウソみたいにはじしゃぎ出る。もしかして、さつきの演技だったんだろうか？

そんな風に思えてくるくらいの豹変ぶりだ。

でも、もしあれが演技だったとしても、これだけ喜んでくれるなら別にいいか。

本を取つてあげただけで可愛い女の子と喫茶店に行けるんだ。悪くはない。

そんな親父みたいなことを考えながら、俺は少女と一緒に近くの喫茶店に向かった。

変な喫茶店

喫茶店内に入ると、とりあえず見渡してみる。

内装は洒落た感じで、壁紙はピンク。

言つまでもなく客は全員女性で、居心地の悪い事この上ない。まあ、皆俺のことを見つてないだらうから、こんな居心地の悪さ感じる必要無いんだけどな。

「わあ、いいお店ですね。座りましょう」

少女ははしゃぎながら俺の腕を引っ張る。

「うわっ、と」

俺はいきなり腕を引っ張られて一瞬転びそうになるが、何とか体制を立て直す。

そのまま引っ張られるままに店内に入つていって、俺と少女は力 ウンター席に座つた。

「…………!?」

いや、ちょっと待て。

何かおかしなのが目に入ったんだが、俺の見間違い…………じゃ、ないよな？

どうして、どうしてこんな洒落た喫茶店にサングラスかけたハゲ頭のおっさんがいるんだ？

あまりにもこの店の雰囲気に合つてないだろ。

「おや、お客様。ワタシの顔に何か付いていますか？」

「え、いや、別に……」

しまつた、知らない内におっさんの方をじっと見てしまつた。だつて、仕方ないだろ？

壁紙ピンクで客も女性しかいない店にサングラスかけたハゲ頭のおっさんつてミスマッチすぎるじゃないか。

しかも今俺のことをお客様つて言つたから、この人この喫茶店のマスターだろ。

どんだけ趣味悪いんだよ。

「では、注文がお決まりしだいお呼びください」

マスターはそう言ってお辞儀をすると、店の奥に消えていった。

「…………す」「マスターさんでしたね」

「はい、見た瞬間吹き出しかと思いましたよ」

マスターには悪いけど、多分初めてこの店に来た人皆驚くんじゃな
いか?

「好きな物頼んでくださいね。私が払いますから」

「いえ、そんなの悪いですよ」

「本を取つてもらつたお礼ですから、遠慮しないでください」

「別に遠慮してゐ訳ではないんですけど…………」

女性に払つてもらうのは男として気が引けるんだよな。

いくらお礼だからって、いつも時は男が払うのが筋つてもんどう。
う。

まあ、それ以前に少女は俺の事を男だとは思つてないだろ?から、
早いとこ男だつてこと云々なきやな。

「やつぱりこいつのことは男が払うべきでしょ?」

「えつ?男の人なんて、どこにいるんですか?」

「目の前にいるじゃないですか?」

俺は人差し指で自分の顔を指しながら言ひ。

「そんな、冗談ですよね?えーっと…………?」

少女は多分俺の名前を言おうとしたんだろうけど、まだ自己紹介を
してないから言えるはずもない。

「芹沢です」

「あ、ありがとうございます。芹沢さん、女の方ですよね?」

「いえ、だから、男です。ちなみに、オカマでもありませんよ」

俺がそう言つと、少女は驚いた表情で俺の身体を上から下までじつ
と見てくる。

まあ、当然の反応だな。

「でも、その服つて文物の服ですよね?ブランドの

「ブランドがどうかは知りませんけど、父が服屋の社長をやっていましたから送られてくるんですよ」

「…………そなんですか。今まで気付かなくてすみませんでした」

少女はそう言つと申し訳なさそうに頭を下げる。

「別にいいですよ。もう慣れますし」

「いえ、本当にすみませんでした。遅れましたけど、私は桜内愛梨さくない あいりです。よろしくお願ひしますね」

「いらっしゃ。俺は芹沢梓です」

「…………梓って、やっぱり女性じゃないですか？」

「だから違いますって！」

そりや梓なんて名前の男はそういうだらうけどね。

両親が俺が生まれる前から決めてた名前なんだから仕方ないじゃないか。

先に3連続で女の子産んだからって、今度も女の子だらうとかいう意味不明な理由で名前を決めてて、結局生まれてきたのが俺だったらしい。

一応親父は名前新しく考えようつて言つたらしいんだけど、お袋が譲らなかつたんだと。

まあ、一応お袋も生まれる前から名前決めておくのは止めたみたいで、弟が生まれた時は普通の名前をつけたんだけど、その名前が『幸村ひきむら』つてのはどうかと思う。

時代劇見てて歴史上の偉人の『真田幸村』にちなんだと言つ話だ。

「お客様。男の名前で梓つてのも、また一興ではありますか」いつの間にか来てたマスターがいきなり言つ。

「Jの店にカップルが来るのは珍しい。今日のお代、ただにしておきますよ」

マスターはそう言いながらジュースの入ったコップを一つだけ置くと、先が2つに分かれているストローを入れた。

「さあ、どうぞ。Jゆっくり」

マスターは俺と桜内さんに不適にほほ笑むと、店の奥へと戻つて行

つた。

俺と桜内さんはその後の姿をただただ見つめる」としかできなかつた。

変な喫茶店（後書き）

誤字脱字があれば」指摘お願いします。

海まで急げ

「私、実はアイドルになりたいんです」

マスターに出してもらつたジューースを飲み終え、しばらく話していると、桜内さんがいきなりそんなことを言い出した。

「ああ、それでの本を買おうとしてたんですね」

「はい。今日ここ近くでアイドルのオーディションをするので、少しでも参考にしようと思って」

そう言えば、確かに姉貴が言つてたな。

そのせいで俺はこうやって外でブラブラすることになつたんだつけ。まあ、オーディションの打ち合わせのおかげで桜内さんに会えたんだからいいか。

「へえ、そのオーディション受かればいいですね」

何人受けるかも、何人受かるかも分かんないけど、桜内さんなら受かるだろ。

「そうなればいいんですけど……噂によると倍率50倍以上らしいんです。受かる人数も7人だけですし。私自信全然なくて……」「うわあ、7人の50倍って、350人も受けるんですか？」

「はい。そうなると思いつ……」

「いや、それどころじゃありませんね」

「「マスター！？」」

またしてもいきなり現れたマスターに俺も桜内さんも同時に驚く。ホントに突然現れる人だな、おい。

「そのオーディション、当日参加OKだつたはずです。当日参加も含めると下手すれば100倍になる可能性もあるかと」

「…………マジですか？」

おいおい、それだと一体何人受けになるんだ？

大体そんなに大人数のオーディションってどこでやるんだよ。

この小さな町にそんな大がかりなことできる場所なんてあつたか？

「こんなことだつたら姉貴に詳細聞いておけば良かつたな。

「これはただの噂でしかありませんが、可愛いだけでは駄目らしいですよ」

「どういう事ですか?」

「もちろん容姿端麗である」とも条件ですが、なんでも今回はアイドルの売り出し方が普通ではないらしくてですね。普通では考えられない試験をやるんだとか。まあ、どんな内容かは知りませんがね」

「そうなんですか……」

桜内さんは『はあ～』と大きく溜息を吐く。

それはそうだろ?、ただでさえ高い競争率なのに、それが更に高くなるんだもんなあ。

「まあ、とにかく受けないとには受かりませんからね。お密さんもお綺麗ですし、頑張ってみてはどうですか?」

「そうですよ、桜内さんなら絶対受かりますつて」
いくら競争率が高くて試験が普通じゃなくても、やっぱり可愛い人を合格させるはずだ。

桜内さんレベルの人気が7人以上いるなんて思えないから、普通に考えれば問題ないだろう。

「私も芹沢さんみたいに可愛ければ自信持てるんですけど……私、可愛くありませんから……」

「そんなことないですよー桜内さんは可愛いですって!」
思わず大声で言つてしまつて、周りの視線を集めてしまつ。
しかも、今気付いたけど、俺女の子になんて事言つてんだよ。
これじゃあまるで桜内さんに告白してるみたいじゃんか。
桜内さんも顔を真っ赤にして俯いちゃつてるし。

桜内さんがあまりにも自信を持つてないからつい言つちゃつたけど、これつてやばくない?

「あ、あの……せ、芹沢さん?お、お世辞は嬉しいんですけど……」

「その……」

「いや、これは別にお世辞じゃなくて……」

本心なんだけど、これを言つたらまた可笑しなことになりそうだな。何かいい言葉はないかと考えていると、マスターが助け船を出してくれた。

「お客さん、そろそろオーディションの締め切りが終わりますが、行かなくてもよろしいんですか?」

「…………え?」

「時計はあちらです」

マスターが指差した方向を見ると、時計は12時半を示している。「オーディションの受付終了は1時でしたね、確か」なるほど、受付終了が1時ってことは、後30分か。

「これって、やばいんじゃない?」

オーディションをどこでやるかは知らないけど、場所によつては30分じゃ行けないからな。

「マスター、オーディションつけてどうやるの?」

「確かに、海でやるって聞きました」

「マジで?」

「マジで」

それじゃあもう間に合わないじゃん。

ここから海まで歩いて行つたら1時間くらいかかるから無理。タクシー呼ぶにも時間がかかるし、電車は海の近くで止まらない。やっぱこ、どうしよう?

「芹沢さん、どうしまじょう?このままでは間にあいませんよね?」

「どうしまじょうって言われましても…………

情けない事にどうしようもないんだよな。

今からすぐに車が出せればいいけど、そんなに都良くは行かな……

「車、出しまじょうか?」

「と思つていたんだけど、このマスター今何て言つた?」

「あ、あの、もう一度言つてくれませんか?」

……。

おずおずと桜内さんが聞く。

「ですから、お送りしましようかと言つたんです。」そのままでは間にあわないでしょ？」

「それはそうですが、いいんですか？」

「問題ありません。で、どうします？」

「どうしましょう？ 芹沢さん」

「いや、俺に聞かれましても……」

オーディション受けの俺じゃねえし。
聞かれても答えようがないんだよな。

「あ、そうですよね。すみませんでした」

桜内さんはそのまま頭を下げる。

「そんなことはいいので、どうするか決めた方がいいですよ」

「は、はい。…………えっと、それじゃあ、お願いしてもよろしいですか？」

「そうですか。では、車の準備をしてきますね」

マスターはにやつと笑うと店の外に歩いていく。
どうやら、ホントに送ってくれるみたいだ。

初対面なのに、どれだけ親切な人なんだよ。

「あの、芹沢さんにも付いてきてもらつていいですか？ 一人では不安なので」

「別にいいですよ、それじゃあ行きましょうか」

やつ言つと、俺は桜内さんの手を引っ張つて歩き出した。

今思えば、この軽率な返事が後悔を産むことになるんだよな。

取扱いのペーパーテイション（前書き）

サブタイトル考えるのって難しいですね。

受けたの？オーテイション

「着きましたよ」

「あ、ありがとうございます。」

俺と桜内さんは満身創痍になりながらもマスターにお礼を言い、車から降りる。

車に乗つてこんなに疲れたのって初めてじゃないだろ？

そりやマスターも気を利かせてくれて急いだんだろうけどさ、いくらなんでも運転荒すぎるだろ。

隣で桜内さんは失神寸前になつてゐるし、俺だつて怖くて目を開けていられなかつたんだよな。

速度メーターは見てないけど、多分100キロは出てたと思つ。もしそこまで出てなかつたとしても、警察に見つかつたら確実に捕まる速度だつたのは間違いない。

まあ、何にせよ1時には間にあつたし、事故にも遭わなかつたから結果オーライなんだけど、もう一度とマスターの車には乗りたくないな。

「大丈夫ですか？ 桜内さん」

「は、はい。まだちょっと足がふらつきますけど」

それつて大丈夫じゃ無いじやん。

1人で立てないみたいだから手を差しだす。

「あ、ありがとうございます」

桜内さんは俺の手を掴むと、何とか立ちあがつた。

足はまだ明らかに震えていて、手を離したら一瞬で崩れ落ちるだろう。

「では、お客様。幸運を祈つて店で中継を見てしますよ」

マスターはダンディな声で言つと、サングラスをキラリと光らせながら車で颯爽と去つて行つた。

多分、サングラスの奥ではウインクとかしてたんだろうな。

俺と桜内さんは車が見えなくなるまで茫然と見送っていた。

「つと、こんなことしてる場合じゃない。早く受付に行きましょう」

「あ、そうですね」

幸いマスターのおかげで時間に少し余裕は出来たがそれも数分。俺達は急いで受付に向かった。

受付は分かり安く大きな看板があるのですぐ見つかる。どうやらまだ受付は終了していないようだ。

「す、すみません。う、受付ってまだ大丈夫ですか？」

息を切らしながら桜内さんが聞く。

「あっ、君たち参加希望者！？」

タオルを海賊巻きにした男性はひたすら気付くと、ハイテンションで聞き返してくる。

「いや、俺はちが……」

「いやあ、ぎりぎりだよ。後1分で受付終了するといだつたじゃないか。せ、2人とも付いて来て」

「きやつ…」

「うわつ…？」

男性は人の話しも聞かずに俺達の腕を引っ張つて走り出す。さつき『付いて来て』って言つたじやんか！

どうして腕を引っ張る必要があるんだよ。

「ちょ、ま……」

『まつてください』って言いたいんだけど、すごい勢いで走るもんだからなかなか言えない。

結局何も言えないまま待機室に着いてしまい、数字の書かれたプリートを渡された。

「それ、無くさないよつにしてね。じゃあ、係の人呼んでくるから少しここで待つて」

そう言つと男性は鼻歌を歌いながら去つて行つてしまつ。少しでもいいから人の話聞いてほしかったな。

「芹沢さん、どうします？女の子に間違われてしましましたけど」

「そうですね。別の人気が来たら事情を話しますよ」

いくらなんでも連續で人の話しを聞かない人が来る事も無いだろ？
もし男だと信じてもらえなくても、最悪の場合ズボン脱げば一発だからな。

心配は無いだろ？と思つてたんだけどさ。

まさか、よりもよつてこの人が来るとは思わないじゃない？

「…………」

「…………」

「姉貴、どうしてここにいるの？」

俺の目の前にいるのは姉貴こと芹沢里奈。

桜内さんには何かしら理由を付けて席を外してもらつていた。

「それは私のセリフだと思うんだけど、違つたかしら？」

「いえ、あなた様の仰る通りでござります」

そりやまあね、姉貴が勤めてる事務所のアイドルオーディションだもん。

姉貴がいるのが普通で、俺がいるのが可笑しいんだよな。
分かつてる。

分かつてるけどさ、元はと言えばそつちのミスじゃない？

俺の性別も確認しないでここまで連れてきちゃってさ。

そりや何も言わなかつた俺も悪いっちゃ悪いけど、9対1くらいの割合であつちが悪いと思うよ、俺は。

「あんたがアイドルになりたいっていう気持ちはよく分かつたわ。
そりやその美貌ですもの。生かしたいって考えるのが普通よね。だけど、普通は姉が勤めてる事務所のオーディション受けるかしら？
少なくとも私は受けないわね」

「別にアイドルになりたくて来たんじゃないし」

「じゃあ何でここに来たのよ？」

「それは…………」

俺はどうしてこうなつたのかを搔い摘んで説明する。

「…………ふーん、じゃあ、あんたはその娘の付き添いで來たつてワ

ケね？」

「そう、分かつたら早く俺の参加取り消してくれよ」
テレビで中継もされるらしいし、こんなのに出てもし知り合いに見
られたりしたらもうやつてられないしな。

こう考えたらここで姉貴に会えたのは幸運だったかもしれない。

「えーとね、それ、無理だわ」

前言撤回。

ナンノヤクニモタタナイジャンカ。

「何で無理なんだよ！？」

「だつて、あんた連れてきた人鈴木さんって言つんだけど、あの人
めちゃくちゃでね。あんたが男だつて知つたら余計におもしろがつ
て絶対辞退させてくれないわ。それどころか、オーディション前か
ら合格出しちゃう可能性もあるわね」

「マジですか？」

「ええ、大マジ。とにかく普通にオーディション受けて落ちるしか
ないわね。まあ、追い打ちかける様で悪いけどさ、あの人今『すぐ
い美人さん2人キター！！！』ってはしゃいでるから、あんたが合
格する可能性が高いってのが現状なんだけど、そこは自分で何とか
しなさい。一応私も努力するけど、あの人より権力下だからほとん
ど何もできないわ。じゃあ、私の言えることはそれだけだから
姉貴はそう言つと、俺の肩をポンと叩いてからすたすた歩いて行
く。

「こりや、ヤバい事になつたな」

俺はそう呟くだけで精いっぱいだった。

受け取るへのオーティショーン（後書き）

誤字脱字があれば」「指摘お願いします。評価や感想も待っています。

奇妙な試作品

「…………ふう、ビーリンヒー…………」

俺は紙袋とにらめっこしながら呟いた。

多分、はたから見たらすんごい変人に見えるだらうな。

それは自分でも分かってるんだけど、どうしてもいつ言わずにはいられないんだ。

どうしてこんなことになつてるかって？

まあ、普通は想像もつかないだろう。

俺が悩んでるのはこの紙袋の中身のせいだ。

この紙袋、『一応着替えなさい』とか言られて姉貴から渡された物なんだけど、とんでもない物が入っていた。

まず一つ目はふりふりのいっぱい付いた青色のワンピース。

これは100歩譲つてまだ分かる。

そりやあアイドルオーディションの衣装だもん。

形だけとはいえ一応ちゃんとした物着なきゃいけないからな。

んで、2つ目は指輪やネックレスとかアクセサリー類。

これもまあ、特に問題は無い。

問題なのは3つ目だ。

なんか嚴重に包装されてて、『何だらう？』って思つたんだよ。箱を開けて、紙を取つて、エアクッションを取つたらさ、何が入つてたと思う？

おっぱいだよ、おっぱい。

本物は見たことないけど、多分これ本物と遜色無いんじゃない？

弾力なんかもう人肌とほとんど一緒で、今の技術つてこんなにも進歩したものだと感心したさ。

一緒に入つてた紙には何やら色々書いてあつて、とりあえずこれが

試作品で、名前は『エアバスト』って言うのが分かった。

他には時速80キロで走る車から手を出した時と同じ感触とか書い

てあるけど、それはどうでもいい。

付け方は専用の接着剤を塗つて張るだけらしいんだけど、男としてこれをするのはどうなのよ？

これ付けたらもう俺が俺じゃ無くなる気がするんだが、気のせいかな？
「あ、あの、芹沢さん、さつきから難しい顔してどうしたんですか？」

「えっ？ 俺そんな顔してました？」

しまった、あまりにも中身にショックを受けすぎて周囲のことを気にしていなかつた。

慌てて近くにある鏡で顔を確認すると、ふむ、確かにいつもの顔じゃないな。

「すみません、ちょっと、これを付けるかどうかで悩んでて」

俺はそう言つと、『Hアバスト』を桜内さんに渡す。

桜内さんにはもう全部話してあるから問題ないだろう。

桜内さんは初めて驚いた顔でそれを見つめていたが、少しすると意を決した様に手に取つた。

押したり摘まんだりして色々興味深そうに弄りだす。

男の俺には分からぬけど、やっぱり女子はこうこうのに興味があるんだろうか？

俺は胸の大きさは気にしないけど、学校では大きい胸が好きな奴も多いからな。

女子はそんなことも気にしなきやいけないんだから、ホント男で良かったと思うよ。

「あの、これ、何なんですか？ それと、どうやって手に入れたんですか？」

「えっと、とりあえず『Hアバスト』って言つらじこです。まだ試作品らしいですけどね。姉が持つてきたので、詳細はよく分かりません」

「そなんですか……残念です……」

「ん？ 何か言いました？」

最後の方小さくてよく聞こえなかつたな。

「ふえ？あ、いえ、何でもないです……」

「…………？」

何て言つたか気になるけど、本人が言いたくないなら仕方ないか。
それよりも、今はこれを付けるか付けないかだな。

俺的には付けたくないけど、付けないで男だってばれても困るし、
難しいところだ。

「それで、どうした方がいいと思います？」

「そうですねえ」

桜井さんは唇に人差し指を当て、可愛らしく考える。
この動作って不細工がやると気持ち悪いけど、やっぱり可愛い子が
やると様になるな。

…………どうでもいいか、そんなこと。

「一応付けておいた方がいいんじゃないですか？ばれてしまつては
元も子もないですから」

「そうですか…………分かりました。じゃあ、付けます」

どうせいつも文物の服を着てるんだ。
これくらい気合いで何とかしてやる。
俺はそう決めると、更衣室に入った。

奇妙な試作品（後書き）

誤字脱字があれば」指摘お願いします。感想や評価も待っています。

審査の内容

「…………これ、ホントに俺かよ…………」
着替え終わり、鏡で自分の姿を見た瞬間、俺はそんなことを呟いていた。

ワンピースを着てエアバストを付けただけで、こんなにも人の印象つて変わるんだな。

まあ、これなら知り合いに見られてもばれないだろ？し、万事OKなんだけど、なんでだろう？

男として終わつた気がする。

「あの、芹沢さん。着替え終わりましたか？」

1人で落ち込んでると、カーテンの向こうから桜内さんが声をかけてくる。

「すみません。今出ますね」

俺は待たせてしまったことを謝り、更衣室から出る。

桜内さんも俺が着替えてる間に着替えたらしい、さつきとは服が変わっていた。

白を基調にしたもこのこの服で、ビトなく羊を連想してしまつ可愛らしい服だ。

「その服似合つてますね」

「そうですか？芹沢さんも、すゞく似合つてますよ」

「あ、あはは、そう言つてもらえると嬉しいけど、ちょっと複雑……」

そりや似合つてないってズバッと言われるよりはいいのかもしれないけど、これはこれで辛い。

世の中のオカマに失礼だけど、女装の何が楽しいんだ？

俺には全く分からぬ。

しばらく話していると、扉が開き眼鏡をかけた中年のおっさんか入ってきた。

「今から1次審査を行いますので、会場に移動してください。審査の内容もその時に発表します」

おっさんはそれだけ言つと、扉を開けたまま出でていく。

待機室にいる出場者達はざらざらと移動を始めた。

「審査の内容つて何なんでしょう？」

「分かりませんけど、マスターの情報が正しければ普通じゃないでしょうね」

『正しければ』と言ひはしたが、多分マスターの情報は正しい。なぜなら、さつきセツトを少し見たが、明らかに可笑しな物がいくつもあつた。

あれを見る限りだと、審査が外見だけで決まるとは考えられない。落ちるのが目的の俺にとつては好都合だが、桜内さんにとっては厳しいだろ？

「とにかく、覚悟を決めるしかありませんね」

「私、頑張ります」

桜内さんは胸の前で拳をぎゅっと握り、気合いは十分みたいだ。

「じゃあ、行きましょうか」

「はい」

俺達は待機室を出て、会場に向かつた。

『では、第1次オーディションのドッヂボールを始めます！』

元気な声で司会者らしき若い女性が宣言する。

今、何て言った？

なんで、アイドルのオーディションでドッジボールをやらなくちゃいけないんだ？

「…………ドッヂボール…………？」

隣で桜内さんが茫然と呟く。

桜内さんだけじゃない。

周りの参加者達もざわついている。

『皆さん困った顔をしてますねえ。かわいそだから説明してあげ

ましょ「つ」

司会者はそう言つと、ポケットから白い紙を出す。

説明してあげましょうつて言つたのに、話す内容覚えてないのかよ。

『えつと、1次審査の内容はさつき言つた通りドッヂボールです。10人1組でチームを作り、勝ったチームの全員が2次審査に行くことができます。負ければ当然全員アウトなので、チームワークが大切ですよ。ルールは基本普通のドッヂボールで、首から上に当たってもセーフです。チームはクジで決めてありますので、後に発表します。とりあえずこの1次審査で1500人の出場者が750人になっちゃいますので、運動苦手の人は得意な人と組めるように祈つてください。例えば、その背の高いワンピースの人と組めればラッキーかもしませんね』

司会者的人は俺を指差しながら言つ。

それにつられて皆が俺を見るが、それって大きな間違いなんだよな。だって、俺ワザと当たるからなんの役にも立たないし。

『それじゃあチームの発表いくよお！まず1チームは…………』

司会者が次々と出場者の番号を呼んでいく。

俺と桜内さんの番号はなかなか呼ばれず、時間がだけが過ぎていく。

『126チームは、1499番、1500番…………』

いい加減聞くのがめんどくさくなつてきた頃。

ようやく俺の番号が呼ばれた。

俺の番号は1499番だ。

「あ、やつと呼ばれた」

「私もです」

「…………え？」

俺と桜内の声が重なつた。

審査の内容（後書き）

誤字脱字があれば」指摘お願いします。評価や感想も待っています。

決断（前書き）

今回わざと短いです。

決断

「あんた、何で1次審査勝っちゃったの？」
俺は今、姉貴に説教されていた。

どうして怒られてるかって？

そんなの簡単、さつき姉貴が言つたじゃないか。
1次審査勝つちましたんだよ、ちくしょう。

しかも誰から見ても俺の大活躍でな。

だつて、仕方ないじやん？

桜内さんと同じチームになつたのにワザと負ける訳にはいかないじ
ゃんか。

「これにはや、色々深い事情があつて」

「気変わらしたとでも言つの？あんたがアイドルになりたいってな
ら別にいいんだけど、父さんや母さんには何て言つつもりなのよ？」
「いや、俺は別にアイドルになりたい訳じやなくて」
俺はびっくりドッキーボールを頑張ったのか説明する。

「ふーん、じゃあ、あんたその桜内つて娘のために頑張つたんだ？」

「まあ……そういう事かな」

「それつて、ヤバいわよ」

「なぜ？」

「だつて、最終審査まではずっと同じチームでやるんだもの」

「…………マジで？」

「ええ、マジで」

姉貴がきつぱりと言つた瞬間、俺はその場で固まつた。

だつて、それつてやばいじやん？

桜内さんに協力しようと思つた、最終審査まで行かなくちゃいけな
い訳だ。

どう考へても俺の精神が持たねえよ。

もともと一回戦で負ける気だったからまだ耐えたけど、長時間女

女装なんて耐えれる気がしない。

そりゃ知り合いに見られてもばれないとは思つけど、実は俺、女装にトライアドで

思い出すのも嫌だから、どんなのかは聞かないでくれ。

とにかく、俺はここでどちらか選択しなけりやいけない訳だ。

自分の為に桜内さんを犠牲にするか、桜内さんのために自分を犠牲にするか。

ここは漫画の主人公とかだったら迷わず後者を選択するんだろうけど、あいにく俺にはそんなの無理だ。

いやだ、考えても見るよ。

自分が俺と同じ状況だとして、こんなに耐えれるか？

当事者として言つておぐが、絶対無理だぞ。

「やうやう、これだけ言つておくけど、男であるためには男を捨てなくちゃいけない。昔父さんが言つてたわ。私の言いたい事はそれだけ。後は自分で考えなさいね」

姉貴は意味ありげにそう言つと、ひらひらと手を振つてどつかに行つてしまつた。

1人になり、もう一度よく考えてみる。

『男であるためには男を捨てなくちゃいけない』

この言葉、一度今の俺に当てはまる。

男としてのプライドを捨てずに非紳士的行為をするか、男としてのプライドを捨てて紳士的行為をするか。男としてのプライドを捨てればいいかは分かつてる。

「ここは逃げるのは男じゃねえよな」

どうせ外見で男になるのは無理なんだ。

だつたらせめて内面だけでも男でいてやる。

絶対最終審査まで行つてやるうじやないか。

最終審査まで行つて、そこで落ちればいいんだ。

桜内さんと出会つちまつたのは不運だったかもしれない。

彼女と出会わなければこんな事にならなかつたんだから。

でも、出会つちまつたもんはしょうがない。
最後まで力の限り協力してやろう。

決断（後書き）

誤字脱字があれば」指摘お願いします。

結果発表（前書き）

今回結構長いです。

結果発表

決断した俺はがむしゃらに頑張った。

2次審査の持久走リレーも最下位から逆転して3次審査に進み、3次審査の鉄棒ぶら下がり耐久勝負も5人分くらいの時間耐えて4次審査に進んだ。

5次審査も6次審査も大逆転で勝利し、最終審査。チーム戦は終わり、ここからは個人戦だ。

「あの、芹沢さん、大丈夫ですか？」

最終審査の準備が整うまでの休憩時間。

待機室で椅子に座つてぐつたりしてゐる俺に、桜内さんが声をかけてきた。

「めむやくむやつらいです」

俺は今の気持ちを包み隠さず答える。

もうホント疲れた。

足はがくがく震えるし、腕の血管は切れそうになるし。正直言うと卑く帰りたい。

「それなら、どうしてそんなに頑張るんですか？」

「いや、どうしてって言われましても……」

特に理由なんて無いんだよな。

けど、まあ、強いて言うのなら。

「桜内さんのためですかね」

「えー？」

一瞬にして顔を真っ赤にする桜内さん。

なんか『ボンッ』ていう効果音が付きそうだな。

「え、えーと、わ、わた、わたし、えっと、その……」

桜内さんは顔を真っ赤にしたままわたわだと手を振つて、意味の分からぬことを言つてゐる。

この反応を見て思つたんだけど、俺つてわざとらぬ事言つ

た？

思い返してみれば、わたくしのつまどんじ告白だよな。
さつきまでは何ともなかつたのに、そう思つた瞬間恥ずかしくなつ
てきた。

多分、俺の顔も桜内さんみたいに赤くなつてゐるんだろう。
首から上の体温が上がつてゐるのが自分でもよく分かる。

「今のはそういう意味で言つたんじゃなくて…………」

じゃあどういう意味で言つたんだろうね？

自分で言つておいて分かんないや。

「今のはナシ！ナシでお願いします！」

いやあ、情けないね、俺。

もう男らしさの欠片も無いじゃないか。

いつそのことモロッコ行つて肉体改造して来ようかな…………。

「分かりました！ナシですね」

「ナシです！忘れちゃつてください」

ホント、なんあんなこと言つちやつたんだろ。

やっぱ女装のせいで可笑しくなつてんのかなあ…………。

ちよつとしたじたじたもあつた休憩時間が終わり、終に最終審査が
始まる。

明るかつた空はもう暗くなつていて、多くの照明が使われていた。
さつきまでは全然気にならなかつたけど、この会場つて意外とでかい。

東京ドームとまではいかないが、3分の2くらいはありそうだ。
観客席はこんな時間になつたにも関わらず満席で、多くのカメラマ
ンがカメラを回していた。

そう言えばテレビ中継されていたんだつけ。

まあ、俺には関係ない話しだな。

『さて！長かつた戦いも最後になります！1500人いた参加者は
なんと30人にまで減ってしまいました。この中から選ばれるのは

7人だけ。泣いても笑つても7人だけです

長い間話し続けているのに相変わらずハイテンションの司会者が言う。

『最後の審査内容は自己紹介と1分間のアピールです。1分間と言う短い時間でどれだけアピールできるか、これが勝負の分かれ目となるでしょう。では！トップバッター108番の方、どうぞ！』

「はい！」

元気な返事と共に、108と書かれたプレートを付けた娘がステージに行く。

俺達には事前に審査内容が知らされていて、どんなことを話すかは考えてある。

ちなみに、今まで名前は伏せてあつたが、今回は名前を言つらじい。

俺は本名言つと色々まずいから、偽名を姉貴から授かつてゐるんだけど、その名前が『前田松^{まえだまつ}』つてのはどうかと思う。

あの有名な戦国武将の前田利家の奥さんの名前なんだ。
お袋に似て姉貴も歴史オタクなのを忘れてたよ。

まあ、そんなことは置いといて。

俺の出番は最後だ。

こんな大掛かりなオーディションの大トリが俺つてのはどうかと思うんだけど、平等なクジの結果じゃしちゃうがない。

ちなみに桜内さんは2番目だ。

さつきからガチガチに緊張してて、大丈夫か心配になつてくる。

「桜内さん、リラックスリラックス」

肩に手を置いて話しかける。

「ひやあっ！」

少しでも緊張がほぐれてくれればと思つたけど、逆効果かな？

「だだ、だだだ、大丈夫です。き、緊張なんか、して、ません」

いや、明らかにしてるでしょ。

これで緊張してないつて言つのなら、緊張してる時つてどんなんのよ？

「大丈夫です。桜内さんなら余裕ですって」

言つちや悪いけど、今までの意味分からん審査のせいで、20人位残念なお顔の人がいまして。

普通に考えると確率10分の7な訳なんだ。
俺が抜ける事を考えると9分の7で、落ちる確率のが少ないんだよな。

『お疲れさまでした！続きまして、1500番の方、ビリヤー。』
108番の人が終わって、桜内の番号が呼ばれる。

「ひやー！」

……おい、いきなり噛んだぞ。

桜内さんは力ク力クとロボットの様に歩いていく。

何かやけに不自然だと思ったら、右手と右足同時に出てるんだな。
ここで日本人本来の歩き方をするとは、緊張してるのかリラックス
してるのか…………緊張だな、絶対。

不安でいっぱいになりながら見ていると、桜内さんはマイクの前に
たどり着きそうなところで。

「さやあー！」

転んだよ。

何も無いところで。

それはもう見事に。

顔面から。

桜内さんはおでこを強打したらしく、おでこを擦つてから立ちあが
る。

「わ、私は、桜内愛梨です。えっと、趣味は、お菓子を食べたり、
作ったりすることと、えつと……」

話す内容が思い出せないらしく、桜内さんはその後『えつと、えつ
と』を繰り返す。

どこからどう見ても失敗なんだけど、ある意味これで良かつたのか
もしれない。

だって、観客や審査員の反応は抜群なんだ。

『『デジっ子かわいーー』とか『愛梨ちゃんサイーー』とか、なんかもう、すごいよ。

「とにかく、よろしくお願ひします！イタツ！」

結局桜内さんが話す内容を思い出す事はなく、時間が切れて強引に締めた。

しかも、お辞儀をした時にマイクに頭をぶつけてまたおでこを押さえている。

もうデジっ子もここまで来ると神だな。

「あうう～、ダメでした」

桜内さんはおでこを擦りながら半泣きになつて戻つてくる。完全に意氣消沈していて、『ずーん』という形容がぴったりだ。

「多分、大丈夫ですって。後は信じて待ちましょう」

「…………そうですね」

桜内さんは暗く言つと、椅子に座つてガクッとうなだれる。他の参加者たちは桜内さんの様子を見てガツツポーズしてたりするけど、最低だな。

普通は、慰めるとか、心の中でガツツポーズとかじゃないのか？誰が選ばれても俺には関係ないけど、そんな人たちには選ばれてほしくないな。

最終審査は順調に進んでいつて、終に俺の番。

ステージ裏にいる他の参加者たちは泣いたり祈つたりしてゐる。

「じゃあ、行つてきます」

桜内さんに声をかけてステージへと歩いていく。

ステージの上は思つたよりも眩しくて、思わず目がくらんだ。少し顔をしかめながら歩いき、マイクの前に立つ。

一度お辞儀をしてから、俺は自己紹介を始めた。

『皆さん今晚は、エントリーナンバー1499番、前田松です』

そう言つてもう一度お辞儀をする。

「清楚系キター！」

「……よー……可愛いやー！」

拍手と共にそんな言葉も飛んで来て、背中がぞくつとする。
いやあ、男に可愛いとか言われるのって慣れてるつもりだったけど、
やっぱり気持ち悪いわ。

とくかくひとつひと言ひ事言つて終わらせよつ。
ワザと落ちる言葉は姉貴と一緒に考えた。

その言葉とは……

「実は私、握力60kgもあるんですよ」

これだ。

だつてほら、考えてみろつて。

付き合つてる彼女がいきなり『実は私、握力60kgもあるの』な
んて言つてきたらさ、幻滅するんじゃない?
少なくとも俺は速攻で別れるね。

それに、ほり、見てみる。

思い通り観客や審査員たちはポカソン顔で固まつている。
さて、ここでとどめを刺しておくか。

「すみません、用意しておいてもらつたリンゴ、もうえませんか?」
ポカソン顔で固まつている司会者に言つ。

「え? あ、これですね?」

「はい」

「ど、どうだ?」

司会者は戸惑いながらも俺にリンゴを渡してくれた。

「では、見てください」

俺はリンゴを片手で持つと、思いつきつ握る。

すぐにリンゴから果汁がにじみ出てきて、数秒後、リンゴは辺りに
果汁を撒き散らして碎けた。

「では、皆さん、よろしくお願ひしますね」

俺はペコリとお辞儀をすると、勝手に退場して行つた。

ステージ裏に戻ると、みんな何とも言えない顔をしていた。

あからさまに『バカじゃないの?』みたいな視線を向けてくる人とか、『何こいつ?』みたいな視線を向けてくる人とか色々だ。ライバルが一人減つたんだから喜べばいいのに。よく分からぬ人たちだ。

「芹沢さん、力強いんですね」

椅子に座ると、桜内さんが小声で話しかけてくる。

「一応鍛えてますからね。あれくらいは余裕ですよ」

俺も男のはしぐれだ。

筋骨隆々の肉体に憧れたりもする。

だけど、一向に腕とか足とか太くならないんだよな。

一応筋肉は付いてるみたいなんだけど、ホント不思議なもんだ。

その後は結果発表までしばらく雑談して、ようやく結果発表の時間になった。

30人全員ステージに上がられ、照明は全て消された。

『それでは!お待ちかねの結果発表です!』

ハイテンションで司会者が言つ。

『では!まずは1人目は…………この方だ!』

ダラララララララ、という太鼓の音と共にスポットライトがあっちこっちに行ったり来たりする。

10秒くらいこれが続いて、『ダン!』という音を最後にスポットライトが止まった。

「…………は?」

照らされているのは……ナント俺だった。

結果発表（後書き）

誤字脱字があれば」指摘お願いします。感想や評価も待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136p/>

アイドルは男の娘！？

2011年2月3日11時31分発行